『中外日報』平成８年１月25日付（25412号）2-4面

震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

臨黄

墨跡展収益を震災救援に

●妙心寺派　「だるま寺」として知られている法輪寺（佐野大義住職、京都市上京区）は、二月二～四の三日間、兵庫県南部地震からの復興を祈願して節分会を行なう。例年、佐野住職自身の揮毫による掛け軸や禅画を展示即売する墨跡展が好評を博し、多くの人々が買い求めている。昨年は震災救援金として、その収益二百万円を寄付したが、「今年も寄付するつもり」と佐野住職。ちなみに今年は中国の書家による墨跡も二、三出展される。こちらの方は、売り上げはそのまま中国に送られることになる。「向こうで学校の校舎を建てるために使われる」とのこと。なお、そのうちの一点は、すでに佐野住職が講入済み
▽今年の法輪寺の節分会も、震災救援を趣旨とする墨跡即売展に加えて諸堂拝観や達磨禅画、庭園公開、名物「だるま説法『その名は忠々子歳』」など、さまざまな行事を予定している。多くの人々の協力と共感を得て、法輪寺では着々と準備が進められている。

真言

●智山派　▽成田山では一月十七日午前八時半から照碩貫首の導師で「阪神大震災一周忌法要」が営まれた。成田山では昨年二月から毎月十七日に、照碩貫首の導師で、地震被災者の霊を慰める法要が営まれている

浄土

互いに力を携え、復興へ

●浄土宗　兵庫教区（貴田康住教区長）と浄土宗（成田有恒宗務総長)、総本山知恩院（牧達雄執事長）は、三者の共催により十九日、神戸市の神戸文化ホールで「阪神・淡路大震災物故者一周忌法要」を厳修した。法要には震災で亡くなった犠牲者の遺族、親族ら約一千人が参列。追悼の誠を尽くした
▽兵庫教区の各寺院の檀信徒で犠牲となった人々は約四百人に上っている。会場に参列した遺族、親族約一千人の多くが喪服に身をつつみ、読経に合わせて一心に合掌する姿、すべての参列者が宝前に花を手向ける姿を目の当たりにして、今更ながら被害の大きさ、家族の悲しみの大きさを知らされた。法要後、挨拶に立った貴田教区長も西宮市の自坊・西蓮寺の本堂が全壊するなど大きな被害に見舞われた被災者の一人だが、挨拶の中で「昨年三月に挨拶するよう拝命を受け、この一年、何を言ったらいいのか考えてきたが、今になっても申し上げる言葉がない」と語った言葉には胸を刺すものがあった。同教区長は挨拶で大要、次のように語っている。「今日の一周忌法要は昨年三月の教区会で決定し、浄土宗と知恩院に諮り、兵庫教区だけでなく、浄土宗と知恩院の三者が一体となり、今日の法要を迎えた。昨年三月に挨拶するよう拝命を受け、この一年、何を言ったらいいのか考えてきたが、今になっても申し上げる言葉がない。一口に六千三百余人が亡くなられたと言われるが、六千三百余人は、あの震災で瓦礫の下敷き、柱の下敷きになって、どんなに苦しい思いだったろう。下敷きで生きていても、寒いうえに、長く苦し

い時間を経て、救難がもう少し早ければ助かった人もあったと思う。長田区は火災もあった。そういうことを考えると申し上げる言葉がない。一年を経過し、一月十七日のテレビの番組では、ＮＨＫは長時間にわたって震災関連の放送を行なっていたが、民放ではほとんど震災関連の放送はなかった。これはいつまでも阪神・淡路大震災ではないぞ、という視聴者の気持の表われのように思う。犠牲者の遺族は、お互いに力を携えて立ち直りに協力して頂きたい。世の中は少しずつ震災から遠のいている動きであるように思う。力を携えて立ち直っていこう。一生懸命、言葉を考えたが、亡くなられた方々の冥福を祈る他にはない。未来に向かって頑張っていこう」と

▽一年前、全国民の目が集められ、被災地に義援金を届け、大勢のボランティアが被災地に救援物資を届け、救援活動を行なった大震災だったが、日々刻々と移り変わる世相に目を奪われ、ともすれば忘れがちになる。震災当時、テレビや新聞を通じて飛び込んでくる現実に驚愕し、痛ましく思われた気持も次第に薄れている。ボランティアも徐々に減っている。あるテレビ局のニュースキャスターが「震災の報道の視聴率が落ちているのも現実だ」と、十七日に放送された番組の中で語っていたが、国民の目も次第に震災から離れていることも確かであろう。しかし一周忌を迎え、浄土宗の兵庫教区檀信徒の遺族、親族だけを見ても、家族を失ったホールいっぱいの悲しみが未だに癒されないでいる。しかも、こうした災害では弱い立場の人々ほど物心両面でのしわ寄せがいくのが今も変わらぬこの社会の現実であろう。復興への努力が徐々に重ねられ、力強く立ち上がる被災者が多い中、弱い立場の人々が復興から取り残されないよう、しっかりと現実を見ていく必要がある。十七日に総本山知恩院でも一宗当局と知恩院当局で一周忌法要がもたれたが、成田宗務総長はその時の挨拶で「そうした移り気を懺悔したい」と述べ、また十九日には「殉難の諸霊が休まれている寺院の再建こそ、檀信徒の皆さんの心のよりどころの再建だと信じている。被災寺院の復興を今年一年の大きな目標として全力を挙げて進みたい」と述べた。時間がたてば風化するのも現実だが、一方でそうした現実を直視し、支援を続けていく人々がいないと帳尻が合わない。浄土宗では護持料の交付、課金免除、利子補給、復興資金の貸し付けを四本の柱として復興支援施策が平成九年度まで続けられる。手続きが煩雑なことなどを理由に指定寄付の取り扱いを断念した教団もあったようだが、幸い浄土宗では昨年末に指定寄付の認可も下りた。一年が経過し、本格的な復興支援に向けての取り組みはこれからである。

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)